ウイリアム・ブレイク

――「虎」――

竹森修

「虎」

虎よ、夜の森に
輝き燃える虎よ、
どんな不死の手、あるいは眼が
お前の怖ろしい均斉をつくりえたのか、

どんな遥かな深海に　あるいは天空に
お前の眼の焔が燃えていたのか、
どんな翼で彼は敢えて天翔けえたのか、
その火を敢えて掴んだ手はどんなだったか、

して　どんな肩が、またどんな業(わざ)が
お前の心臓の筋を捩(ねじ)りえたのか、
そしてお前の心臓がうちだしたとき
どんな怖ろしい手、どんな怖ろしい足、

その鎚は何、その鎖は何
どんな熔炉にお前の脳髄があったのか、
どんな鉄床(かなとこ)、どんな怖ろしい指が
その致死の恐怖を敢えて握ったのか、

星たちがその槍を投げおとし
天空をその涙でうるおしたとき
彼は自ら創ったお前を見て微笑(ほほえ)んだのか、
仔羊を創った彼がお前を創ったのか、

虎よ、夜の森に
輝き燃える虎よ、
どんな不死の手、あるいは眼が
お前の怖ろしい均斉を敢えてつくったのか。

The Tyger

Tyger! Tyger! burning bright
In the forests of the night,
What immortal hand or eye
Could frame thy fearful symmetry?

In what distant deeps or skies
Burnt the fire of thine eyes?
On what wings dare he aspire?
What the hand dare sieze the fire?

And what shoulder, & what art,
Could twist the sinews of thy heart?
And when thy heart began to beat,
What dread hand? & what dread feet?

What the hammer? what the chain?

In what furnace was thy brain?
What the anvil? what dread grasp
Dare its deadly terrors clasp?

When the stars threw down their spears,
And water'd heaven with their tears,
Did he smile his work to see?
Did he who made the Lamb make thee?

Tyger! Tyger! burning bright
In the forests of the night,
What immortal hand or eye
Dare frame thy fearful symmetry?

われわれはみんな生れつきの鍛冶屋であります。分別意識の大鎚で分別意識の鉄床（かなとこ）をとってかんと叩いては、「可死の生命の時間、空間、太陽、月、星を絶え間なく創っている」のであります。これが常識、道徳、法律によって秩序づけられた、客観として眺められる世界であります。客観世界はわれわれの自己意識の所産であります。意識をはなれて世界はないのであります。（尤もその意識が問題なのですが。）もしあるというのなら、そんな世

界はあたまで考え出した抽象であり、われわれ生死の人間には関係のないものであります。このことは大事なことであります。ところで意識をはなれて客観世界があると主張する人たちがある。客観世界の絶対的実在を主張する人たちがいる。しかし客観世界とは客観化した世界、主客分裂の世界ということであります。それは分別の働きである自己意識の投影であります。従って客観世界が絶対的実在であると主張するのは、自己意識が分別したものを、分別したのでない。つまり絶対であると主張することであります。分別しておきながら分別したのでないという、これが近代の科学的実証主義であります。これは両性の怪物（「主観と客観とが不毛の混融をなして、不可分の、抽象のつまり虚妄の世界を形成する」――ノースロップ・フライ）であります。科学的実証主義が到るところ大手をふってのさばり歩く今日は、この両性の怪物に片足のこして呑み込まれてしまった人間の図であります。

ところで、客観世界を創造するのはわれわれなのだというと、力みかえった英雄みたいで、聞えはいかにもよいのですが、中味は必ずしもそうではないのであります。ひとつにはそれは「永遠の死」との食うか食われるかの戦いなのであります。もしも分別意識の大鎚がいい加減な仕事をすると、二元世界の秩序は崩れ、われわれはそれこそ分別しながら分別しない不毛の混沌状態に、両性の怪物が大口開けて待ちかまえている「サタンの空虚」、「永遠の死」の淵に忽ち呑み込まれてしまうのであります。（男女関係の頽廃に象徴される混沌の現代世界は、先程も申したように、どうやら片足のこしてそれに突込んでしまっているようであります。）男女関係の頽廃と実証主義精神の横行とはどうやら無関係ではないようであります。実証主義精神が価値の世界の大混乱の元兇であります。さてわれわれは足下にひそむ両性の怪物を分別意識の大鎚でもって分別意識の鉄床の上で打ち砕き、分別意識の熔爐（煩悩が火）に投げ込んで、自己と他、善と悪、真と偽というようにものごとを分別し、こうして二元対立の世界を創造しているのであります。それは両性の怪物ではなくて、男性と女性という対立に象徴される世界であり

ます。この分別の世界で道徳や法律や常識がなくなったら、百鬼夜行であります。強盗、殺人、ありとあらゆる犯罪が横行することでありましょう。これは要するに自我主張であり、その意味では分別の働きではありますが、しかし他者をそれによって否定するという点で無分別の働きであります。分別の無分別、不毛の混沌であります。これは主観客観の超越を求める宗教意識の超分別、有無を超えた無分別（論理はかく無能力である）の逆立ちしたものであります。世の中が乱れると宗教意識が逆立ちして現われるとはおもしろいことであります。

さて、そういう意味では、常識、道徳、法律の秩序世界は有難いものであります。それをつくり出すわれわれの分別意識は有難いものであります。しかも生れつき眼耳鼻舌手が外向いているために、「永遠の死」との戦い、客観世界の創造が努力なしにできるゆえにますます有難い。五感が分別意識に支配されているゆえに、ふり下す分別意識の大鎚はつまり「植物的肉体」の心臓の鼓動（「ふいごが肺で熔爐が新陳代謝」――ノースロップ・フライ）なのであります。われわれは骨折らずの鍛冶屋、不戦の英雄であります。

ところで客観世界の創造、分別意識の働きにはいまひとつの、今度は有難くない局面があるのであります。ブレイクは分別意識がつくり出す二元対立の客観世界を「世俗の殻」（Mundane Shell）と呼んでいますが、それは「永遠の死」から身を守ってくれる殻であると同時に、分別意識が客観化する以前の本来的世界を把握するヴィジョンを妨げる殻でもあります。われわれ骨折らずの鍛冶屋が自分でつくって自分を閉じこめている殻、自我の殻であります。そのようにみますと、夜の空に輝く星たちというのは（太陽や月をひっくるめても勿論構いませんが）どうやら束縛の鎖の輪ということになるのであります。つまり「世俗の殻」を形成する因果の鎖であり、自我の殻の投影であります。星たちが槍をかまえて投げおとすのはこの自我の殻を破ろうとするわれわれに向ってなのであります。分別意識が脅かすのであります。

ところでこの自我の殻の内が「夜の森」の夜、煩悩の太陽輝く真っぴるまの夜、主体的人格が眠っているあき盲の夜であります。そんな夜の中の秩序など案外いい加減なものであります。常識や法律が独り歩きすると、それは他人の品定めや自我主張の道具やかくれ蓑になる。偽善がのさばるのであります。その偽善の果実を実らすのが「夜の森」の森であります。それはわれわれのあたまの中に生えている森、ブレイクが、

大地と海の神々は
この樹をば見つけんものと自然をくまなく探したが、
そいつは無駄骨折りだった、
それは人間の脳髄の中に生えてる樹だからだ。

とうたっているその樹、善悪を知るの樹、道徳の樹であります。われわれは外向きの眼をもち、自分の脳髄を健全と心得ぎっているためにそれと気付かないけれども、われわれのあたまの中には道徳の樹が不満、しっと、不信、陰謀、中傷、軽蔑、お情けなどの肥料(こやし)ゆたかに生い茂っているのであります。この道徳の樹が繁茂し取り囲んで出来ているのが「世俗の殻」、自我の殻だといってもよい。常識や法律や道徳を生活の依りどころにしているようなわれわれから出てくるものは善でも悪でもなくて偽善であります。コンラッドの「闇の奥」に登場する「巡礼者」たちのように、腹ふくれるばかりで指一本の行動に出る度胸もない。あたまの中にますます陰然と樹が茂るばかりであります。「ジェラシーの樹」であります。T・S・エリオットは、「われわれが人間である限り、われわれが為すことは悪か善かのいずれかでなければいけない。悪を為す限り、あるいは善を為す限

り、われわれは人間なのだ。逆説的な言い方をすれば、何もしないよりは悪を為す方がましである。少くともわれわれが実存していることの証拠になるからだ」、と申しておりますが、無為の偽善が一番救いようがないのであります。偽善は人間を人間でなくしているのであります。ボードレールは、「おお、偽善者よ、わが同胞(はらから)よ」、とわれわれに呼びかけてくれましたが、そのわれわれの青天白日の世界(真暗やみの夜の森)はD・J・エンライト氏の云う「痰を吐いて下駄で消す」罪障消滅の世界、おかげで地獄へも堕ちてゆけない連中のあつまり、人間不在の世界であります。こういうわれわれの境位のブレイク的イメージが「母胎」の中の胎児であります。「世俗の殻」自我の殻が母胎の幻想に化けるのであります。胎児の場合、母胎という外的条件はそれを支配しながら同時に保護しているのでありますが、丁度同じ状態をわれわれは求めるのであります。母胎の中の眠り、自分が受け入れている二元世界の対立性が問題化しない状態、無問題の状態であります。しかしこれは因果の鎖にしばられその支配のままになる状態であり、いかなる行動も存在しない一種の生ける死であります。それは慈悲深き母であるどころかわれわれを真綿で締めあげる貪婪極まるマザー・ゴッデスであります。ところでわれわれは自己意識をもつ偽の胎児であります。母胎は現実ではなく幻想であります。われわれはしばしば不安のかたちで二元世界の対立性を意識せしめられ、母胎の幻想を脅かされるのであります。自己意識をもちながら母胎の幻想を追っかけるということは現実によくあることであります。いわゆる「甘えん坊」であります。一旦自己意識をもちながら本ものの母胎に逆戻りするのはこれはインセストであり、もとより許されない。甘えん坊は成就不能の幻想に憑かれていつまでも母親についてゆく。いつまで経っても独り立ちの青年になれない。母親の方でも、子供を独り立ちさせようとしない、成就させることのない母胎の幻想をいつまでも子供にもたせようとする、そういう愛情に満足している。子供の成長を喰い殺すマザー・ゴッデスであります。これを描いたのがD・H・ロー

レンスの「息子たちと恋人たち」であります。母性愛は一面では最も純粋な人間的愛情でありますが、まかりまちがうと最も醜悪な、所有欲の愛情に変るのであります。わたくしは先に、二元世界は男性と女性という対立によって象徴されると申しましたが、母と子の母胎的な愛情によって象徴されるところの、二元世界の対立性の歪んだ把握と解決ではなく、結婚を目指すところの愛し愛される男女によって象徴される対立であり又それの解決でなければいけないのであります。対立性を無視するのでもごまかすのでもなく、対立を対立として把握することであります。結婚するためには先ず母胎の幻想を棄てて、男らしい男、女らしい女にかえらなければいけないのであります。

ところで「世俗の殻」、自我というわれわれの境位は奇妙に相矛盾した働きをすることに注目すべきであります。われわれは自分でつくった「世俗の殻」の中に手胡坐(てあぐら)かきながら、他方では無意識のうちにそれからのがれようのがれようとしているのであります。二元対立をつくり出しながら二元対立からのがれようとするのであります。二元世界の対立性が問題化しない安定の生活を求めるということは二元対立世界を本来的住居とみていない暗号的証拠であります。どうやらこの「殻」の夜空に輝く星の存在は客観世界（分別意識の働き）が天国と未だ縁切れでない証拠であり、「復活」への案内提灯にもなっている。必然的に破れるような母胎の幻想をあえてつくり出しているということはなにかしら内的矛盾をわれわれの自我がさらけ出していることのようにおもわれるのであります。それは現実には復帰することができない母胎という生命の源へ復帰して二元対立の世界を避けようという空しい意志の表われともとれるのであります。わたくしはこれを、無自覚ながら救いを求める自我の声なき叫び、自我ならざる自我の叫びであると信ずるのであります。それもそのはず、「世俗の殻」は因果の鎖の輪であって、それを実在として受け入れてその中に入るとき、因果の鎖の輪が首を締めあげるのであります。し

かもそれは自分の分別意識がつくり出したものであります。自我が自我を締めあげる、これが輪廻の蛇のイメージであります。自分の尻尾をくわえこんだ輪廻の蛇の図であります。先ほどのマザー・ゴッデスは蛇性だったのであります。われわれにとって問題となる生死輪廻とは死後のそれではなく現実世界のそれであります。

考えてみると、生とは死あっての生でありますが、それは人生の終極に死があるという意味だけではないのであります。それはわれわれが時々刻々死にそしてそれによって再生しているということなのであります。ブレイクは、母胎から生み出され、分別意識に蔽われているわれわれに蛇のイメージを適用しておりますが、われわれの生活はまさしく蛇の脱皮の生活であります。蛇の脱皮は死と再生の象徴であります。蛇が脱皮することによって生長するように、われわれもまた刻々の死と再生の生活を営んでいるのであります。しかしこれは決して単なる肉体の細胞組織だけの問題ではないのであります。それは同時に、五感を支配している分別意識の自我の、死と再生でもあるのであります。心臓の鼓動のひとつひとつがふり下される分別意識の大鎚の音である以上、問題はひとつなのであります。実際、われわれは昨日のわれわれとはちがうのであります。現在只今のわれわれは一時間前のわれわれ、一秒前のわれわれともちがうのであります。昨日の失敗にくよくよするのは死んだ自我にこだわることであります。記憶とはすべて死であり、脱皮された自我の殻のことであります。ところで、蛇の脱皮は先ほどの、自分の尻尾をくわえた輪廻の蛇のイメージと連なっているのであります。蛇の脱皮とは云いかえれば新しい生命力が古い生命を侵蝕し死に至らしめることによって生れ出ることであります。内部的に自分が自分を喰うことによって蛇は生長するのであります。そして蛇が蛇性であるかぎり、死ぬことによって、脱皮することによって生れてくるものはやはり蛇であります。これが自分の尻尾をくわえこんだ蛇の姿なのであります。蛇においては死への衝動は、そのままより大きな蛇としての再生への衝動に直結しているのであります。蛇は自ら

を死に、そして死ぬことによってより大きな蛇へと再生する。その蛇がまた自らを死に、そして死ぬことによってより大きな蛇へと再生する。蛇の一生はそれのくり返しで了るのであります。ところで分別意識に蔽われたわれわれはどうでしょうか。もしも分別意識の自我の生活がわれわれの唯一本来の生活であるとするならば、われわれの一生は本然的に蛇の脱皮の一生でありましょう。われわれが時々刻々死ぬことによって生れてくるものはやはり自我の蛇でありましょう。実際、われわれはあたかも蛇性の生がわれわれの生活であるかのように絶えずそれをくり返しているのであります。しかし、われわれは本来蛇性ではないのであります。人間性なのであります。われわれの現実の境位は「汝、人間性に背くもの」のそれであります。なるほど現実にはわれわれは蛇の生活をくり返しておりますが、それはわれわれ本来の生活ではないのであります。それは不自然なのであります。自分の尻尾をくわえこんだ輪廻の蛇、自我が自我を喰う蛇の脱皮は、蛇においては自然なことであります。蛇においては生への衝動、死への衝動は文句なしに蛇性としてのそれであります。蛇はいかに度々脱皮しようとも、蛇性そのものまで脱ぎすてることはできません。できないのが当り前であります。しかしながら、われわれにとっては輪廻の蛇の生活、自我が自我を喰う蛇性の生活、自らつくった因果の鎖に自らをしばる生活はもともと肌に合わぬ生活なのであります。苦痛なのであります。だからこそそれを母胎の幻想に化してしまうのであります。しかしそこに分別意識の致命的な自己矛盾が定着されているのであります。母胎の幻想はそれ自体誤まった最も無気力な生活態度を意味するものではありますが、そこに示されている分別意識の自己矛盾——自ら二元対立の世界をつくり出しその内に入りながら、一方ではそれからのがれようのがれようとしている事実——をわれわれは見おとしてはなりません。これは分別意識が、自我が本来的自己ではないこと、分別意識に蔽われた現実のわれわれは本来的自己に背いた人間であることを物語るものであり、同時にまた、この本来的自己をわれわれ

が無意識に模索していることをも暗示するものであります。このように分別意識の致命的自己矛盾というものをみるとき、分別意識の脱皮生活もまた問題になってくるのであります。こういう矛盾をかかえている以上、その脱皮生活もまた不自然なものに相違ないからであります。脱皮生活においては生への衝動と死への衝動とが働いているのでありますが、なるほど現実のわれわれは分別意識の、自我の生活を送っております、蛇性のそれの如き生活を送っております。なるほど結果的に見るならば、生への衝動も死への衝動も自我を生み出すことになってはおります。しかしながらそれは分別意識がわれわれの現実を支配しているためであり、真実には、それらは自我を死に導く死の衝動であり、本来的自己への復活をもたらす生への衝動であるはずであります。それが分別意識の支配のために本来的な働きができずにいるのであります。しかし分別意識に蔽われている現実のわれわれは蛇の姿に身をやつしていてもわれわれの性は人間であります。蛇性の蛇ではないのであります。蛇はより大きな蛇に生れ変るために蛇を脱皮するのでありますが、われわれは本来の人間に生れ変るために自我を脱皮しなければいけないのであります。事実、われわれはたとえ現実には蛇のごとき生活をくり返してはいても決してそれに甘んじてはいないのであります。二元対立の世界を窮極のものとして生きているのではないのであります。

おお汝　ひまわり　時に倦み
太陽の歩みをかぞえつつ……

蛇はいかに脱皮をくり返しても、蛇性そのものを脱ぎすてることはできませんが、半人蛇は蛇性を脱ぎすてることができるのであります。また絶えず脱ぎすてようとしているのであります。というのはその蛇性とは蛇性で

はなくて、はじめから「世俗の殻」自我の殻だからであります。すでにこの希求は倒錯的に母胎の幻想に投影されているのであります。この幻想の致命的自己矛盾として自らを定着しているのであります。つまり、自己意識をもつ偽の胎児というポーズのなかにであります。このポーズが必然的につくり出す不安のなかにであります。不安は母胎の幻想を脅かし、その幻想を生み出す分別意識、自我を背後から脅かすのであります。不安は分別意識に、「二元分裂世界は母胎の幻想などで表現できるようなものぢゃないのだ」ということを親切に指摘してやり、できれば、「二元分裂世界はお前のでっちあげなんだ、いや、お前自身がお前のでっちあげなのだ」ということを教えてやろうとしているのであります。ところでわれわれ分別意識に蔽われたものたちは不安の意義を解さず、従って不安が示してくれる内面的不条理に気付かず、環境の打開を計ることによって、不安が暗号的に示す折角のチャンスをしばしば無にしてしまう。トランキライザーを服用することによって神経のいらだちを鎮め、精神科医に通うことによって健康体にかえる。大事なことは、不安を病理学的に受けとめないことであります。しかし一生は不安とそれの皮相的解消とのくり返しに了る。脱皮の蛇の生活であります。輪廻の蛇の生活であります。そしてその生活も、自らの分別意識がつくり出した恐怖の死のイメージである輪廻の大蛇の口に呑まれてしまうのであります。それは自我の死でありますが、同時に一切の死であります。われわれ骨折らずの鍛冶屋がつくり出したものは、二元対立の世界の妄影と六十年（平均寿命がたかくなった此頃では七十年）の年功を経たへなへなの痩せ蛇のぬけがらであります。

無為の偽善がいちばんいけないのであります。「痰を吐いて下駄で消す」罪障消滅の世界、母胎のなかの偽胎児がいちばん救いようがないのであります。「混沌から」の著者、スチュアート・ホルロイド氏は、罪びとは聖者のいちばん血のこい親戚だ、と申しておりますが、悪を悪として犯すだけの度胸のある人間は（「ハリウッド

映画」に出てくるような悪を悪ともおもわぬ犯罪者の英雄ではなく）却て聖成への裏街道をはしっているのであります。ブレイクは「消極的善よりは積極的悪の方がましだ」と云っておりますが、それもこれもみんな、母胎の幻想を拒否し、二元分裂世界の対立性を「否定」(negation) としてではなしに「対立」(contrariety) として把握することから問題が出発するのだからであります。

わたくしは先に、不安が分別意識を脅かす積極的な生への衝動の表われであると申しましたが、不安は、われわれ分別意識に支配されたものからみるとき、われわれを呑みこもうとする蛇のイメージとして表われるのであります。これは分別意識の致命的な自己矛盾として自らを定着したものの働きであり、云い換えると、母胎の幻想がうち破られてわれわれの眼の前から姿を消した慈悲深き母なる自然が貪婪な蛇性のマザー・ゴッデスとしてのその正体を表わしてわれわれに迫っているのであります。実際には分別意識のわれわれの方が蛇なのでありますが、そのわれわれを脅かすものが逆に蛇性として映るのは興味深いことであります。それは分別意識の内的矛盾の投影だからであります。ところでこの不安、この蛇性のマザー・ゴッデスが分別意識を自我を脅かしている事実に注目しなければいけません。この蛇は不安が激化するに従い、先きほどの脱皮をくり返す蛇、時間のなかに置かれた堕落した蛇ではなくて、堕落以前の蛇、「翼もち、全身これ輝き、毒気を放つドラゴン」、ノースロップ・フライによると、楽園にあって「生命の樹を守護する焔の剣もてる智天使（ケルビム）」のような様相を呈してくるのであります。わたくしはここで、分別意識を脅かすこの不安について世俗的ペシミズムを例にとって簡単に述べてみたい。

ペシミズムは意欲の執拗な主張とそれの致命的挫折を通じての、二元対立の世界にたいする絶望であります。それにおいては不安は環境の好転によって皮相的に解決されることなく、逆に環境の極度の悪化によって極度に

増大するのであります。この場合、自己と周囲との疎隔対立が激化し、つまり分別意識の働きが絶えざる挫折感のかたちで激化し、こうして分別意識を背後から脅かす蛇は先ほど申しましたように巨大なドラゴン（フライが指摘するように「虎」のイメージと同じものでありますが）の様相を呈してくるのであります。極度の不安であるこのドラゴン（虎）は二元対立の世界について保護の母胎の幻想をいだくことを許さず、対立を対立としてつきつけるのであります。このドラゴン（虎）が生ける死である自我の生を喰い殺し、それを通して真実の生へと復活させるのでありますが、ペシミストは自我の生を唯一の生として疑わず、従って不安のこの意義を解しないのであります。不安が彼の自我を脅かし死へと導いたとき、彼はそこに自我の死ではなく彼の存在そのものの死を読みとる。因果の鎖、蛇の輪に身動きできぬまでに締めあげられて、なおそれを自らの分別意識がつくり出した虚妄とは気付かず、実在とおもいこみ、非情の運命法則が一切を支配していると考える。それの結果があるいは肉体的自殺であるかも知れません。保護の母胎における慈悲深き母なる自然が、非情の運命の女神に化け、さらに死の母胎に化するのであります。結局胎児的態度は変らず、回心が見られなかったわけであります。従って、一時は自我を喰い殺すドラゴン（虎）であるかに見えた蛇も、窮極において本ものの創造的ドラゴン（虎）に成りえず分別意識の、自我の蛇で了るのであります。

さてわれわれがなすべきことはこのペシミストが強制された道を自覚的に切り拓いてゆくことであります。腰抜け蛇を創造する骨折らずの鍛冶屋を廃業して、ドラゴン（虎）の創造に骨折る鍛冶屋になることであります。ところでわれわれはあくまで分別意識に蔽われているのでありますから、われわれの道は分別意識の逆利用を通じて存在するのであります。つまり、「われとは他者である」ことを、意識の分裂症を自覚することであります。二元世界という「世俗の殻」をつくり出しているのは自らの分別意識であることを自覚すること、また現在

なお分別意識に蔽われてその「世俗の殻」の中に閉じこめられたままの自分の境位をごまかすことなく、「対立」として把握することであります。われわれ新しい鍛冶屋が大鎚で叩く対象は、この「対立」をうやむやにする自己満足的自我であります。「ひとたび入れば母胎と化する」世俗の殻を打ち叩くのであります。自己満足的自我を打ち叩き、そして苦悩の熔爐の中に投げ込むのであります。自ら「対立」の中へとび込むのであります。ところで自我を客観化して叩く大鎚もやはり分別意識にちがいありませんが、それはただの分別意識ではない。逆手にとられた分別意識であります。なにかしら創造的なものが分別意識を動かしているのであります。ブレイクはそれをイマジネイションと名付けております。それは母胎の幻想における致命的自己矛盾として自らを定着したものと同じものでありますが、いまやそれは分別意識の支配を制して本来的な姿に立ちかえって働き出すのであります。ところでこれは宗教的イマジネイションであると同時に詩的イマジネイションなのであります。W・B・イエイツは「自己との戦いからは詩が生れ、外との戦いからはレトリックが生れる」、と申しましたが、「世俗の殻」分別意識の自己を実在として受け入れて手胡坐かく詩人が生み出すものは自我主張の詩、自家宣伝の詩、レトリックであり、そこに働くのは外向く眼、つまり詩的イマジネイションではなくてそれの皮を被った意欲の狼であります。ところでイマジネイションは人間に具わる優越的知覚能力ではないのであります。在るとするときそれはすでに客観化されている。客観化、抽象化は分別意識の、自我の働きであり、存在するごときイマジネイションはだから意欲に他ならない。これがコールリッジやワーズワスが代表するロマンチシズムの犯した致命的誤まりであります。しかしイマジネイションがないとも云えない。イマジネイションは有無の存在概念を超えて人間にあるもの（論理はかように無能力である）であります。従ってイマジネイションを考えるとすれば、それはものごとをすべて客体化、抽象化して捉える自己満足的分別意識、意欲との戦いとしてしか表わせないも

のであります。それは意欲を喰い殺す虎であります。分別意識に掩われているわれわれにはイマジネイションはいつも虎の姿、ドラゴンの姿をしてしか表われないのであります。

新しい鍛冶屋とは自己満足的自我を大鎚で叩き、「苦悩の熔爐」に投げこむ人間であり、自分で自分を「対立」の地獄の中に投げこむ男らしい人間であります。その時「世俗の殻」の「夜の森」は本質的な変化をおこす。「夜」は最初のあのスタティックな夜ではなく、ダイナミックな「対立」の「闇の奥」に変る。つまり、山を見ながら実はそれは山でない、分裂症の意識の投影である、それなのにそれを実在の山と考える、そういう無自覚の夜から、今度は、自分が見る山は分別意識の自我の投影であることを自覚し、その自我の否定のために、山は山に非ず、川は川に非ずと自らを否定してゆく、そういう自覚的な夜、自ら創り出した夜であります。自我を喰い殺す虎の眼をもつために自我の眼を自ら盲にしようとするのであります。自我を盲にする過程がそのまま闇を貫き通す虎の眼をもつことへと通じるのであります。また、分別意識が依然として働いているわれわれのあたまにはなお「夜の森」が生え茂っているのでありますが、しかし「夜」が以前の夜ではもはやないように、「森」もまた以前の道徳の樹つまり「ジェラシーの樹」ではないのであります。それは二元世界の対立をいい加減な妥協つまり「否定」としてではなしに、「自我の滅却」へと通じる「対立」として内面的に捉えてゆくための善悪を知るの樹なのであります。偽善しか生み出せないような道徳の樹ではなくて、地獄への入場資格があるような人間、善を知り悪を知り、その対立の意味を知っているような人間のみがもつ樹なのであります。母胎の幻想をもつような人間ではなく男らしい男のみがもつ樹であります。

夜の森をおし分け、いよいよ闇夜が極まったとき、虎の口が自我を喰い殺す瞬間、地獄へまさに堕ちる瞬間、分別意識は最後のあがきを見せるのであります。分別意識の投影である客観世界の星が烈しく白光の「槍」を投

げつけるのであります。この星は自己満足的な分別意識ではなく、「夜の森」に分け入るときに頼りに仰いだ星たち、逆利用された分別意識であるが、その星もまたいまや真の創造には邪魔になるのであります。星たちは槍を投げてそれを妨げようとする。星たちが力尽きて抵抗を止めたとき、分別意識が、蛇の自我があたまを踏みくだかれて死んだとき、地獄へ完全に堕ちたとき、星たちはすでに天使の涙に変って「天空をうるおす」のであります。それは蛇の自我の死を通して真の「復活」、ヒュマニティへの復活と導かれたことの歓喜の涙であります。天国へ導かれたことの嬉し涙であります。かくして「天国と地獄の結婚」が成就するのであります。分別意識は死ぬことによっていまや完全にイマジネイションに従属し、分別意識としてではなしに直観として働いているのであります。かくして黎明がおとずれ、太陽が昇るのでありますが、その太陽は分別意識に蔽われた「悪しき人間の妄想」ではなくて、生命と光の源、外にあるかに見えながら内にある太陽、「イマジネイション」の眼で仰ぐイマジネイションなる神の太陽であります。それを仰ぐとは生命の自覚に立つことであります。

さて、こうして生れるのがイマジネイションの世界なのでありますが、この世界をつくり出す鍛冶屋は一体だれなのでしょうか。それは他でもない、「植物的肉体」である蛇性の自我を滅却して、内なるイマジネイションの肉体へ復活したわれわれ自身なのであります。ブレイクが、「イマジネイションはすべての人間の内なる神的肉体である」、と述べていますように、われわれ新しい鍛冶屋の肉体はイマジネイションの肉体であります。イマジネイションの肉体は、五感が分別意識の支配から解放され、五感が「永遠の世界」に向って開かれた門につまりイマジネイションの自由なる通路になったまさにこの肉体なのであります。そういう鍛冶屋の振り上げる大鎚は鼓動するこの肉体の心臓であり、ふいごは肺、熔爐はこの肉体の新陳代謝であります。いまや開かれた門となった五感、すべて外ではなく内を向いた眼、耳、鼻、舌、手を通してイマジネイションが捉える世界は客観

として見る世界ではなくて客観化される以前のこの世界、「外に在るかに見えながら実は内に、汝のイマジネイションの内に在る」この世界であります。見るものと見られるもの、主観と客観、を超越し、万物一切が人間として、自分と同じ生命として把握されるのであります。男女二元の性を超えた人格（Humanity）の世界であります。またイマジネイションをその肉体とする故に人格は正しく詩人であります。それは存在ではない。存在ならざる存在である。われわれ新生の鍛冶屋の（心臓の鼓動である）

……大鎚の強打は正義
その大鎚の振りは慈悲
その大鎚の力は永遠の罪の赦し

（ジェルサレム・八八・四九）

であります。正義と慈悲、虎の怒りと小羊の愛であります。これこそ「復活」したわれわれの姿であります。

勿論虎と小羊は神なるイエズス・キリストであります。しかし同時に、「人間の永遠な肉体とはイマジネイション、即ち神その人、イエズスである。われわれは彼の四肢である」のであります。（T・S・エリオットも現代においてはキリストは虎となって人間に表われると申しております。）キリストはイマジネイションとして人間に働いているとブレイクはいうのであります。だからこそ先きほど分別意識に蔽われたこの「植物的肉体」が虎に喰われて死へと導かれたとき一切の死とはならずにイマジネイションのこの肉体へと復活できたのであります。キリストが十字架の上でわれわれに代って「植物的肉体」を死んでくれたからだとブレイクは云うのであります。ブレイクはキリストを外在化してはとらないのであります。われわれが本来的自己、人格そのものに立ちかえるとき、そのままキリストの「四肢」となるというのであります。それは内在化ではない。いかにしても存在の概念を適

用できぬイマジネイションだからであります。

汝は人間である、神は人間以上のものではない。
汝自身の人間性を讃えんことを知れ。

とブレイクは申しておりますが、それはキエルケゴールの「神とは主体性である」という言葉とひとつのものであります。神は決して存在の概念を適用されるべきものではない、客体化されるべきものではない、われわれが為すべきことは主体性の追求あるのみであるというのであります。ブレイクはまた「神なる人格」(Divine Humanity)ということを申しております。それは「神的な事柄と人間的な事柄とごっちゃにしている」というT・E・ヒュームのロマンチシズム非難をうけるかも知れませんが、その非難はブレイクの場合にだけはおかど違いであります。ブレイクのいう人格とは存在の概念抜きの人格、いかにしても客体化抽象化され得ず、従って意欲化され得ない人間の主体性のことなのであり、この主体性を直証することをさし措いて神を論ずることは戯論であるがゆえに「神なる人格」と申したのであります。もしそれをさし措けば神は人間から疎外され、客体化されることになる。そういう神は人間があたまで考え出したものなのであります。ブレイクが神をイマジネイションとして把握したのは、まさしく価値におけるこの存在の概念の排除、価値の主体的把握という立場に立つからであります。ブレイクが「原罪」を人間の分別意識に、あらゆるものを客体化、抽象化、意欲化して捉えようとする分別意識に認め、この自己疎外した人間的現実の認識の上に立って、そこから本来的自己の追求に向おうとしたことは、今日、価値の客体化のために死の淵に立っている近代ヒューマニズムと有神論的宗教の現実からして極めて意義深いことであります。